

## 救助、のち、はじめて、小屋泊まり

OWCC 中川和道 20191120

前回到続いて、事故の体験を書いてみる。1990年頃のことだ。5月連休に西穂高から奥穂高をOWCCの3名で縦走したとき、奥穂で遭難者に会い、奥穂高岳山荘に送り届けたのだ。

あの連休は天気が悪く、4日間の全行程で晴れの太陽を見られず、毎日吹雪だった。OWCCのA木、N川、M田の3人パーティーが、吹雪の奥穂高岳山頂をそそくさと後にして山荘へ向かって下っていた時のことだ。セマ谷（白出沢の右俣にあたる谷）の谷底から、男女2名が必死で登ってくるのではないかとよく見ると、女性は片足の靴がない。あかん、これは遭難だ。近づいて話を聞くと、この位置（奥穂高岳山頂から稜線をたどって山荘に向かう途中、セマ谷に向かっていかにも滑落しそうな不安定な斜面を横切る地点）から滑落し、短いロープで結びあっていた2人は互いに引き倒しあいながら白出沢の沢床まで落ちて行ったという。1人が止まっても他の一人がまだ滑落している勢いが強いので、止まっている1人を引き倒して滑っていく、というより、落ち続けていったのだ。体中に打ち身やら擦り傷やらを作りながらも、やや深い新雪のおかげで、岩への暴走激突は、幸いにも避けられたらしい。停まったときには女性の靴はなく、見つからなかったという。男性は「沢床で死体を1人、見ました」と語った。手袋もないままの手は黒く凍傷になっていた。

「救助を要請しますか？」と問うと、「助けて下さい」と言う。OWCCの3人は全員が救助隊長ができる。吹雪の中、さっそく大声で周囲の登山者を集めて協力を要請した。何人かが協力を申し出て下さり、臨時の救助隊を編成した。クライマーではないが何かできることはありますか？と来て下さった2名の方に「山荘には山岳警備隊がおられる。救助要請を伝令して下さい」と頼んだ。学生山岳部の方も3名おられたので何の任務を分担できるかを尋ねたが、訓練経験はあるものの、山荘までの急な岩稜のはしご通過を介助懸垂で降りるまではできません、と言う。うーん。「我々3名を補助して下さい」と頼む。M田が女性を背負って介助懸垂・そのM田をA木が下ろす・N川は自力でよろよろとなら歩ける男性をコンテで降ろす、と分担を決めた。吹雪の中の救助は実に大変だった。山岳警備隊は来なかった。どうやら、他の登山者の事故の救助に出払っていたようだ。3人ともそれぞれ必死で担ぎ下ろし、山荘に入った頃には真っ暗になっていた。山荘の扉を開け、「うおーっ」と中に入ったら、食事を終えた宿泊客がさっと場所を空けて下さり、けが人を担ぎ込んだ。登山者に呼びかけて臨時に編成したのだろうか、医療班がどこからか現れ、2人を収容していった。OWCC3名は、土間に、ぼうぜんとして腰をおろした。やっと、終わったのだ。

さて、夕食を食べなければと思うころ「今からどうなさる？」と山荘の方が尋ねる。「今晚は涸沢まで降りる。このうっとおしい吹雪から逃れるつもりです」と言うと、何と、「救助にあたって下さった方々だ。今晚は山荘で泊まり、山荘で食事をして下さい」。「いや、もともとテントのつもりだったしお金もない」と答えると、山荘の偉い方が耳元に口を近づけ、「救助費用でまかないます」と言う。「はあ・・・」と答える3人はえらく戸惑っていた。A木は小屋泊まりの経験が少しあったが、M田（30才）N川（40才）は、生まれて初めて山小屋に泊まるのだ。不安・・・。

3人のための食事をいただき、案内されたのは、何と、大きな個室。客を追い出して提供してくれたらしい。新聞記者の方が来られた。「本来なら新聞記事として送るのですが本社がもう時刻しめきり。記事にならないですみません」。「いや、名前が出ない方が気楽です」。

笑ったのはそのあとだ。3人とも山では布団で寝たことがない。寝袋に入った。しばらくして、「おい、押し入れがあるぞ。布団が使えるのとちゃうか？」布団に手足を広げたのだが、何だか、寒い。わはははは、と笑って登山の世間にどっぷりつかったのは、2時間も経ったころだった。

翌朝、涸沢から滝上肇さん達が山荘まで登ってきた。「なぜOWが小屋に泊まるのか、有り得ん」とずいぶんいぶかし気だった。救助、のち、はじめて小屋泊まり。すごい体験だった。